

指導と評価を計画立てした模擬授業の実践報告 2022
～学生の理解度に着目して～
Practical Report of a Mock Class with Planned Instruction and
Evaluation

加戸 隆司¹⁾ 豊田 隼²⁾
Kado Takashi¹⁾ Toyoda Hayato²⁾

キーワード:保健体育科教育, 指導と評価の計画, 模擬授業

1. はじめに

平成29年度より本格実施された学習指導要領(以下学習指導要領)により, 子供たちに身につけさせたい力が3つにまとめられ, どのように学び, 何の力をつけるのかが明確化された.⁵⁾⁶⁾また, 主体的で対話的で深い学びの実践を行うにあたり, 児童・生徒を単一時間で評価することに固執することなく, 粘り強く取り組んだり, 自己の学習に振り返ること, 考えを広げ深めていること, 生徒1との触れ合いをする中で評価するために計画立てされた評価を行っていくことが必要となった.³⁾⁴⁾

幼児教育から高等学校, 支援学校まで一堂に会する全国学校体育研究大会において, 2021年愛媛県で行われた第60回大会では, 『主体的・対話的で深い学びを通して, 未来につなぐ体育・保健体育学習 一仲間とともに「愛顔(えがお)」で挑戦する授業の実現一』を実現するために, 学びの過程における評価を教師の指導改善へとつなげる「指導と評価の一体化を一層促す授業実践」の視点から研究が行われ, 授業実践が行われた.⁷⁾さらに今年度開催予定の第61回滋賀県大会では, 『豊かなスポーツライフの実現を目指した, 子供たちの発達段階に応じた系統的な体育・保健体育学習の充実』の大会主題を下に, 各校種において指導と評価の一体化を図った単元計画を作成することの重要性について共通理解が浸透している現状が示された.⁸⁾これらのことから学習指導要領に記載されていることを実現していくためには, 指導と評価の一体化を図った単元計画を作成し, 授業実践していくことが重要であると考えられる.

加戸¹⁾は, 2021年実施の山梨学院大学スポーツ科学部の教職課程の講義「体育科・内容指導論 2(体育実技)」(以下, 本講義)のバレーボールの授業において計画立てさせた評価計画の元, 各時間の評価やテーマに即した授業展開を作成し, 模擬授業を実践させた. 授業後の課題点を修正させた指導案の評価を比較したところ, 2021年度において2020年度より向上が見られた.

また, 授業のアンケートの中で評価に合致する授業展開の難しさや評価に合わせた授業を行う必要に関して理解が深められたという意見・結果が得られた. このことは, 学生の間には評価を意識づけさせて模擬授業を行わせることが教員になってから良い経験につながっていくと考えられ, 今後も評価を計画立てた教職課程における講義を展開していく必要性が感じられた.

しかし, アンケート結果にあったように, 「どのように評価をすればよいのか」や「何をみて評価をすればよいのか」など評価内容に対する学生の理解度は不十分な部分が散見されている.

¹⁾山梨学院大学スポーツ科学部 ²⁾山梨大学大学院医工農学総合教育部

そこで、本報告では、評価方法についてのアンケートを実施し、現時点で学生が抱えてる課題を明確化し、今後の授業実践に活かしていくための一資料とすることを目的とした。

2. 調査方法について

(1)対象講義と対象者について

本講義は、山梨学院大学(以下、本学)スポーツ科学部のキャリア形成科目 D 群に属する授業で中学校高等学校の教員免許取得を希望する学生が履修する。講義の実施方法については、昨年度報告した実施方法と同様である。¹⁾

対象人数は、講義履修者計 90 名とし、内訳は 3 年生 88 名(男性 51 名, 女性 37 名), 科目等履修生 2 名(男性)であった。

(2)学習指導案の評価について

2022 年度に提出された学習指導案を 20 点満点で評価を行った。2021 年度に提出された学習指導案は 10 点満点で評価を行っていたため、両評価を 100 点満点に換算し得点の差を比較した。提出率は、2022 年度は 96.7%, 2021 年度は 85.4%であった。

(3)アンケートについて

アンケートは、本学に所属し、本講義の履修学生に対して実施した。

1) 授業アンケート

本学においては、前期授業終了時に学生に LMS の UNIPA を使用し、授業アンケートを行っている。今年度より新たに導入されたシステムであり、過年度実施のアンケートとの整合性が図れなかったため、今年度は授業アンケートの年度別比較は実施しないこととした。

2) 評価基準に関する理解度アンケート

保健体育科指導論の講義で保健体育の関わる諸理論を教授し、本講義での実践を通じて理解を深めていくため、各グループ5回の講義終了時に、講義前と講義後の理解度の変化は「十分に理解できた」から「全く理解できなかった」、授業内への取り込み状況については「組み込むことができた」から「組み込めなかった」の5件法で回答を求め、各評価の観点で用いる評価方法については、「観察評価」・「学習カード」・「その他」の 3 つの選択肢を用い、指導と評価についての意見は自由記述で回答を求めた。「その他」に関しては、用いた評価方法の記述を求めた。

(4)分析方法

評価の年次差と授業前後の差については、Microsoft 社の Excel を用いて、差の検定は、スチューデントの対応あり t - 検定を用いて検証した。統計的有意水準は 5%とした。

自由記述で得られたデータの分析は、ユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いて形態素解析及びテキストマイニング分析を実行した。解析には Term Frequency-Inverse Document Frequency 法によって算出されたスコア(Tf-Idf 値)を採用した。Tf(Term Frequency)は単語の出現頻度、Idf(Inverse Document Frequency)は逆文書頻度を表す。分析に際して、同義語及び複合語や除外語の設定、記述内容の一部整

形等の前処理を施し、特徴的な意味を持つ複合語に対しては非分割認識を設定した。

3. 結果及び考察

(1) 学習指導案の評価について

2022年度の評価と2021年度の評価の回答数・平均点・標準偏差をTable1, Fig. 1に示した。2022年度の学習指導案の評価の平均点は83.58点($SD=6.61$)、2021年度の平均点は58.07点($SD=21.26$)であった。2021年度と2022年度の2群間で差の検討を行ったところ、統計的に有意な差が見られた($t(174)=10.688, p<.01$)。

2021年度と比べて2022年においては、大きく評価が向上していることから指導の改善が見られたことが伺える。また、分散も少なくなっており、履修学生全体の理解度も向上していることが要因となり、模擬授業を円滑に実践できたのではないかと考えられる。しかし、授業の作成方法を説明する2年次に受講する「保健体育指導論」を2021年度の履修学生は、2020年度が新型コロナウイルスの影響によりオンラインで履修したため、机間指導を中心とした個別対応が十分に実施できなかったことが影響している可能性がある。今後継続した調査を行っていく必要があると言える。

	2022	2021
$n,$	88	88
$M,$	83.58	58.07
SD	6.61	21.26

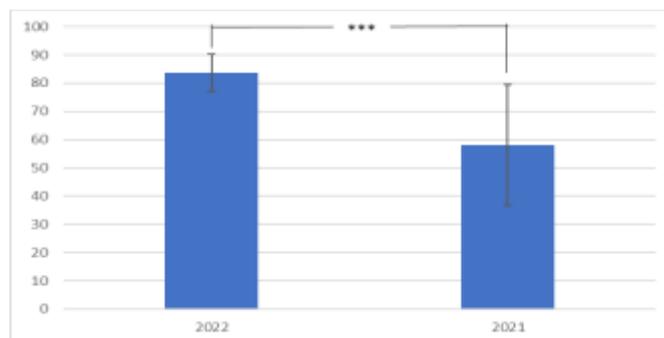


Fig. 1 年度別の学習指導案の評価 *** $p<.01$

(2) 指導と評価を関連づけた授業の理解について

指導と評価の関連についてのアンケート結果の回答数・平均・標準偏差をTable2, Fig. 2に示した。

指導と評価の関連についての理解度の平均は、授業前が3.85($SD=0.85$)に対して、授業後は4.27($SD=0.83$)と上昇していることが分かる。そこで授業前後間で差の検討を行ったところ、統計的に有意な差が見られた($t(65)=-3.47, p<.01$)。このことから模擬授業の実践を通して、授業展開の中に関連する評価を組み込んでいく必要性の認識が深まったことが示唆された。また、学んだ内容を実践する場としての模擬授業を行うことが有効であると考えられる。

授業への組み込み度合いについては、平均得点が4.33($SD=0.69$)であった。このことは、回答が低くても得点数値が3を示しており、履修学生が概ね授業内での評価の組み込みを実施できていたことが考えられる。

授業前後における指導と評価の関連についての理解度と、授業内で指導と評価を関連についての組み込みが行えたかどうかを検討するために、授業前の組み込みの実施度合いと、授業後の組み込みの実施度合いについて得点間の差の検討を実施した。その結果、授業前の組み込みの実施度合いにおいて統計的に有意な差が見られた($t(65)=-3.63, p<.01$)。授業後の組み込みの

実施度合いについては有意な差は見られなかった ($t(65) = -0.49, ns$)。このことから、授業内で理解がそれほどできていなくても指導と評価を関連した内容を行うことにより理解度が増したのではないかと考えられる。また、授業後の理解度と授業内での組み込みを行うことができている履修学生数が酷似していることから、指導と評価の関連に対する理解・組み込みの双方ができていない履修学生が一定数存在している可能性がある。そのため、これらの履修学生に対しての開発的支援が今後の課題となってくると言える。

Table2 指導と評価の関連についての理解及び授業における実施度合いについて

	授業前	授業後	授業内への組み込み
n,	66	66	66
M,	3.85	4.27	4.33
SD	0.85	0.83	0.69

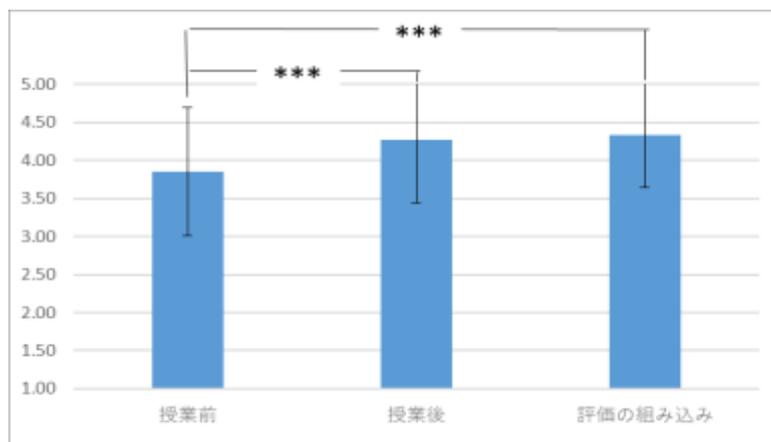


Fig. 2 指導と評価の関連についての理解及び授業における実施度合いについて

*** $p < .01$

(3) 評価規準の評価方法について

評価規準別に使用する評価方法の回答の割合を Table3 , Fig. 3 に示した。

この項目に関して、国立教育政策研究所から提示されている参考資料に掲載されている内容⁴⁾を2年次に実施する「保健体育指導論」と授業のオリエンテーション時に説明をする。「知識」に関しては学習カード、「技能」に関しては観察評価、「思考・判断・表現(以下、思・判・表)」に関しては学習カード、「主体的に学習に取り組む態度(以下、態度)」に関しては観察評価と説明をした。ただし、すべて原則とし、上記の内容に必ず踏襲しなければいけないことはないことを補足説明している。

学生の回答を見てみると、「知識」「技能」「態度」に関しては、概ね教授説明した内容と合致する考え方になっていることが伺える。また、その他と回答した学生は、テストであったり、発表など観察や学習カードと類似した回答をしていることも示唆された。このことから、これら2観点に関しては、指導の中で評価が潜在的にはイメージできているのではないかと考えられる。

思・判・表に関しては、回答が3つに分かれる形となった。このことは、模擬授業を行う中で思・判断・表の評価を困難と感じているのではないかと考えられる。この観点の評価の行い方については、当該授業内で特に丁寧な教授を実践する必要があると考えられる。

Table3 評価基準に使用する評価方法について

	知識	技能	思・判・表	態度
1 観察評価	8%	92%	32%	82%
2 学習カード	86%	3%	32%	5%
3 その他	0%	0%	2%	0%
1・2	2%	0%	32%	14%
1・3	0%	6%	0%	0%
2・3	5%	0%	2%	0%

4. まとめ

- ・課題として提出させた学習指導案は、2021 年度より 2022 年度において成績が有意に向上しており、2022 年度の講義においてさらに学習内容が定着していたことと解釈できる。しかし、2 年次の講義の形態が異なることが影響している可能性もあり、今後詳細な追加検討が必要である。
- ・指導と評価を関連付けた授業づくりへの理解について、授業前より授業後において有意に向上しており、講義での知識獲得、模擬授業での実践を通して理解を深められたことが示唆された。
- ・各観点に用いる評価方法は、知識・技能・態度に関しては 8 割以上の学生が教授内容に準ずる適当な評価方法を用いた。思・判・表において、評価方法の選択が分化される傾向にあり、今後の課題として取り組んでいく必要がある。
- ・指導と評価の関連付けの困難さについては、「評価」「指導」「観察」「生徒」という単語が多く出現しており、生徒を指導しながら全体的な観察を行い、評価することの難しさを多くの学生が感じていることが示唆された。

5. 参考・引用文献

- 1)加戸隆司(2022):指導と評価を計画立てした模擬授業の実践報告,山梨学院大学教職課程教育研究第1巻1号,
- 2)佐々敬政(2020):保健体育科における評価変遷を概観する,兵庫教育大学教育実践学論集第21号, pp. 89-100
- 3)国立教育政策研究所(2020):「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 保健体育
- 4)国立教育政策研究所(2021):「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 保健体育
- 5)文部科学省(2017):中学校学習指導要領解説
- 6)文部科学省(2017):高等学校学習指導要領解説
- 7)全国学校体育研究連合会(2021):全国学校体育研究大会愛媛県大会大会要項
- 8)全国学校体育研究連合会(2022):全国学校体育研究大会滋賀県大会大会要項
- 9)chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/viewer.html?pdfurl=https%3A%2F%2Fwww.tochigi-edu.ed.jp%2Fcenter%2Fcyosa%2Fcyosakenkyu%2Fh29_jyugyokaizen%2Fpdf%2Fh29_jyugyokaizen_01-2.pdf&clen=157142&chunk=true, 2022年2月1日